

当院における初診患者の実態調査-2014-2017

- 藤村理衣, 住吉彩子¹, 杉村和昭²,
石田万喜子³, 進士久明³⁾
(ふじむら歯科りえ小児歯科,
¹スミヨシ歯科口腔外科こども歯科,
²すぎむら小児歯科クリニック,
³いしだまきこ小児歯科)

【目的】開業医として地域の特性を考慮した患者、保護者への対応を検討するにあたり、受診目的や経年的推移を調査、把握することで、今後のスタッフ教育や人員配置などに役立てることを目的に集計を行った。

【方法】2014年から2017年の4年間に来院した2,653名の初診患者について①初診患者数②初診時年齢③初診時の主訴④通院地域⑤初回時の治療内容⑥年間患者数の6項目を集計した。

【結果】初診患者数については、年々減少傾向を示した。また、年齢別では、6～10歳が各年とも40%以上を占め、5歳未満は減少傾向を示し、11～15歳以上はわずかながら増加傾向を示した。主訴については、フッ素塗布を希望するが減少し歯並びが気になるがやや増加している。通院地域については、市内からの通院が大半を占めていた。初回時の治療においては、5年前とほとんど変わらず、保健指導や修復処置、抜歯が多かった。

【考察】初診患者数の減少については、近隣に小児歯科専門医院が増加したことと、市における1歳6か月児、3歳児歯科健診が歯科医院での個別健診から一部集団健診の併用が変わったことが考えられる。単に患者数の減少という問題だけではなく、個別、集団健診後も定期的な口腔管理を行う患者の推移を見守りたい。次にフッ素塗布を希望する患者の減少についても、低年齢層の受診者数減少が影響しているものと考ええる。年間の患者数についても減少傾向を示した。小児の場合、通園、通学時間中の患者数は少ないが、下校時間が重なり始める15時以降の患者数の減少は現在みられないことから、夕方の患者数の減少傾向がでてくるには数年かかるのではないかと考える。また、保育園などの延長保育などで夕方遅い時間に低年齢児の治療予約も増えてきており、時間外対応にも十分な人的確保も求められるようになると考える。今後は、都市部、郊外においても小児の診療時間の再検討と、診療終了時刻まで勤務可能な人員確保の問題も課題となってきた。

う蝕予防の知識の普及度の検討

- 出口 範子
(いでぐち歯科医院)

【目的】

う蝕予防のための正しい知識を効果的に伝達する補助として、知識の普及度を確認する。孫育てに関わる祖父母の増加を鑑み、世代別に普及度を考察する。

【方法】

当院来院者に、カイスの輪の内容を反映したアンケート調査を行い、小児(6～12歳)、親世代(20～50代)、祖父母世代(60代以上)に分けて集計した。アンケートは個人が特定されないよう配慮して作成し、十分なインフォームドコンセントの後、了承を得た者のみに回答してもらった。

【結果】

どの設問も親世代の正答率が高く、小児と祖父母世代を上回った。全世代を通し、歯垢、飲食頻度、イエテボリ法に関しての正答率は高い傾向が、萌出直後のエナメル質の成熟度に関しては正答率が低い傾向があった。

キシリトール入り菓子、スポーツドリンク・経口補水液とう蝕の関連性についても正答率が低い傾向を認め、祖父母世代は「わからない」との回答が、小児は「むし歯の原因にならない」と誤答する率がとりわけ高い傾向を認めた。

【考察】

今回の調査から、小児はう蝕予防、とりわけ食品への知識が十分とは言えず、広告イメージの影響を強く受けている可能性が示唆された。当院は親と来院することが多く、親世代への情報伝達は比較的良好だったので、今後は小児本人と祖父母世代への知識普及の強化に努めたい。また、全世代に対し、永久歯への交換期という特性を今後はより強調し指導したいと考えている。